2. 川崎市と二ヶ領用水のかかわり（二ヶ領用水の概要）

2.1. 二ヶ領用水の歴史

二ヶ領用水とは、慶長 16（1611）年に竣工した我が国有数の古い農業用水です。江戸時代に稲毛領と川崎領にまたがって開削されたことに、その名は由来します。網目のように設けられたこの用水を中心に地域共同体が形成され、川崎市の骨格をつくり上げていました。

二ヶ領用水の建設は徳川家康の江戸入府に伴い、江戸近在の治水と新田開発を命じられた用水奉行小泉次大夫の差配の下に、地域の農民が力を合わせ、14 年の年月を費やして慶長 16（1611）年に完成しました。用水の完成によって、稲毛領と川崎領の米の生産量は飛躍的に伸びました。しかし、開削から 100 年が経過した江戸中期には、各所で老朽化が目立つようになったため、御普請役人の田中休愚の指導の下、「上河原取入口圦樋」や「久地分量樋」など大規模な改修が行われ、江戸中期には 60 ヶ村、約 2,000 ヘクタールの水田に水が引かれるようになりました。（その後も水田は増え続け、明治 42（1909）年には最大の約 2,850 ヘクタールとなりました）。

明治初期には、飲料水不足に悩んでいた横浜に、二ヶ領用水の水を供給することを目的に、鹿島田堰から横浜まで木樋管を埋設し、横浜水道の水源となった時期もありました（工事不良等で漏水も多く、大改修するもままならず、明治 20(1887)年には別ルートの導水路が開設され、二ヶ領用水からの引水は終りました）。

二ヶ領用水の周りには、豊かな田園風景が広がっていました。文豪田山花袋の「東京近郊一日の行楽（大正 12(1923)年）」という紀行文集の中には、榎戸、登戸、溝の口あたりを散策したくだりがあり、花袋は二ヶ領用水がある風景を絶賛しています。（参考資料-1）

また、二ヶ領用水からの引水は水田だけでなく、畑や桃畑、梨畑にも利用され、昭和初期ごろ中原区域は全国でも有数の桃の産地でした。川崎区の大師河原は長十郎梨の発祥の地であり、大正初期ごろには一面に梨畑が広がっていました。なお、長十郎梨は当時、梨の栽培品種の約 8 割を占めていました。

時代が進み昭和になると川崎市の工業化が進行し、これまで水田であった土地の宅地化も進み、川崎市の人口も急速に増加しました。高度経済成長期に入ると、昭和 30(1955)年に約 45 万人だった人口は、昭和 35(1960)年には約 63 万人になりました。

一方で、川崎市の海沿いの埋め立てが進み工場が増えるに従い、昭和 14(1939)年には、二ヶ領用水の余剰水を上平間の取水口から取り入れた、日本初の公営工業用水道が創設され、海沿いの工場地帯に工業用水が供給されました。市内の 16 工場に給水され、戦時中には大量の水を消費する軍需工場にも二ヶ領用水の水が使われていました。更に、昭和 34(1959)年には稲田取水場が建設され、更なる水が二ヶ領用水から工業用水として市内各種の工場へと配水されました。このように、

田畑を潤してきた二ヶ領用水は、時代の変化とともに「もう一つの二ヶ領用水」として工業を支える大切な役割を果たすようになりました。

こうした中、昭和30年代半ば（1960年～）の急激な都市化により、二ヶ領用水には多くの生活排水が流入し、水路にはヘドロが堆積し、悪臭や水質の悪化が問題となりました。昭和49（1974）年には、生活排水の混入で水質悪化が進んだことにより、二ヶ領用水の上平間の取水口からの取水については停止されました。このように、一時期は水質の悪い時期がありましたが、その後、下水道整備が進んだことや、市民の日頃からの清掃活動などによって、現在二ヶ領用水の水質は、大幅に改善されています。

近年の川崎市は、再開発が活発となり、大規模マンション等の開発ラッシュを迎え、人口 140万人を超える巨大都市となりました。

現在の二ヶ領用水は、農業用水の役割をほぼ終えつつありますが、都市の中で、憩いや安らぎを与える水と緑の空間として、また川崎市の発展の礎を築いた歴史のシンボルとして、多くの市民に愛され親しまれています。

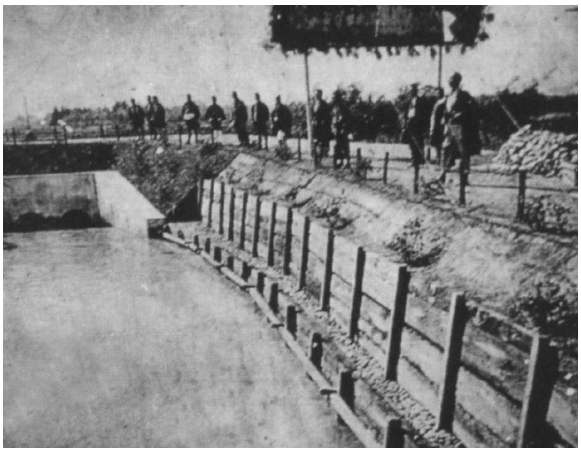
上流域を中心に、自然環境や景観に配慮して、石材を使用した親水護岸や木製デッキ等が整備され、風情ある環境を創出しており、昔ながらの草堰が残されている箇所も見られます。

二ヶ領用水沿川では、市民が散策や花見などを楽しむほかにも、多くの市民団体が清掃活動や桜や桃の植樹と管理、魚つかみ・散策などのイベント、歴史研究などの様々な活動が行われています。

次世代を担う子ども達にとっても、自然と触れ合い、郷土川崎を知る貴重な生涯学習の場として、二ヶ領用水を将来にわたって残し、受け継がれていくことが期待されます。

（二ヶ領用水を利用した生活の様子（昭和12(1937）年）

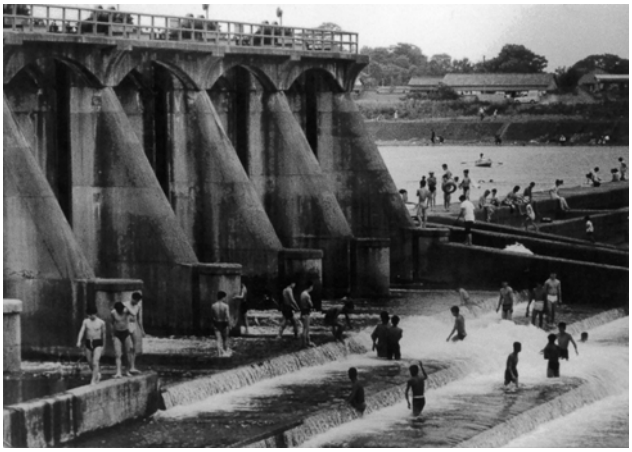
写真 2　二ヶ領用水の歴史を示す写真（1）



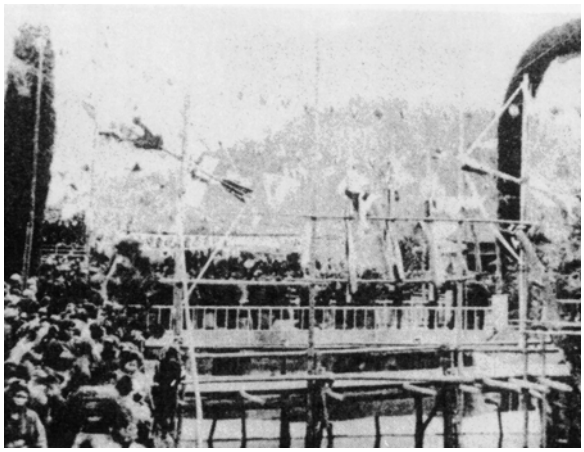
（明治 43(1910)年につくられた八幡下圦樋）

（蛇籠でつくられた宿河原堰）（昭和初期）

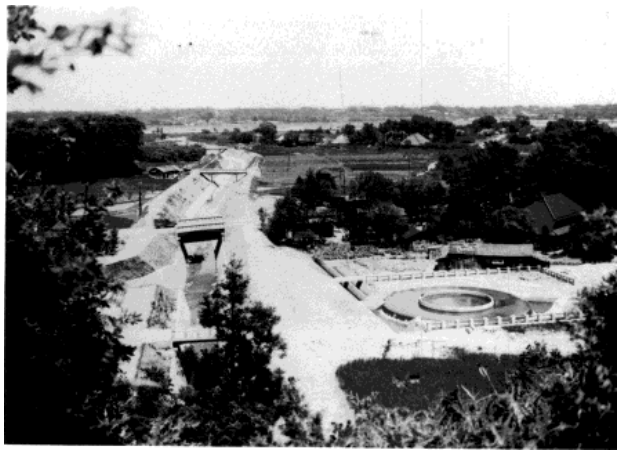
（昭和 20(1945)年竣工の上河原堰）



（近代の宿河原堰（昭和 24(1949)年竣工））



（明治 33(1900)年の小泉橋の再架橋開通式）



（昭和 16(1941)年 久地円筒分水完成時）

写真 3　二ヶ領用水の歴史を示す写真（2）

図 7 二ヶ領用水 400 年史（二ヶ領用水知絵図 改定版より）

図 8　二ヶ領用水の変遷（二ヶ領用水知絵図 改定版より）

2.2. 二ヶ領用水久地円筒分水

二ヶ領用水には、現存する歴史遺構が多くありますが、その中でも代表的なものとして、久地円筒分水があります。

江戸時代、二ヶ領用水は多摩川から上河原堰および宿河原堰の２箇所で取水されたのち、高津区久地で合流し、「久地分量樋」へ導かれ、そこで四つの堀（久地堀、六ヶ村堀、川崎堀、根方堀）に分水されていました。

分量樋は、堰から溢れ出る流れを樋（水門）によって分ける施設であり、これにより各堀への分流比を保とうとするものでしたが、川の中央部は流れが速く流量も多くなり、川岸に近い部分は流れも緩やかで流量も少ないという川の性質から、なかなか正確な分水ができず、水量をめぐり水争いが絶えませんでした。

そこで、昭和 16（1941）年、多摩川右岸農業水利改良事務所長であった平賀栄治は、平瀬川の改修に際して農業用水の正確な分水ができる装置として円筒分水の方式を採用したものです。平瀬川の下を潜り、再び噴き上がってきた水を円筒の円周比により四つの堀に分水し、各堀へ用水を供給できるように造られたのが「久地円筒分水」です。

円筒分水の技術は、当時としては最も理想的かつ正確な自然分水方式の一つだったことから、近年に至るまで各地で同様のものが築造され、現在も全国に 100 を越える円筒分水が存在しています。

戦後、視察に訪れた連合国軍総司令部の技師により、アメリカにも紹介されたと言われています。

「久地円筒分水」はその歴史的な重要性や、全国に広がる初期の円筒分水の事例であることから、平成 10（1998）年に国の登録有形文化財に登録されています。

地元では、平成 17(2005)年から町会や市民団体を中心に、毎年３月末に春の到来を告げる「円筒分水スプリングフェスタ」が実施され、多くの市民が集い賑わっています。また、平成 21（2009）年には、高津区による円筒分水修景整備も行われ、現在は地域の方々による美化活動などが進められているほか、平成 23（2011）年には築造から 70 年の節目にあたり、全国の円筒分水関係者に呼びかけ「水との共生」をテーマに、第一回全国円筒分水サミットが開催されています。

修景整備前（平成 18(2006)年 10 月）　　修景整備後（平成 24(2012)年 10 月）

写真 4　久地円筒分水の風景

写真 5　円筒分水フェスタの様子（平成 22(2010)年 3 月）

2.3. 二ヶ領用水の現状

(1) 二ヶ領用水の現状

・二ヶ領用水は、高度経済成長期の住宅化に伴い、治水機能が優先されたことから、多くの区間でコンクリート化され、また一部の区間では直線化されて、昔の様相を大きく変えています。

・支川においては、用水が存在していても、多くが暗渠化や蓋架けがされており、堰と多数の分水路などが消失しています。

・暗渠化や蓋架けがされている区間については、上部を緑道や公園などに利用しているほか、当時の遺構が残されている箇所があります。

・二ヶ領用水は、二ヶ領本川、上河原線、宿河原線、円筒分水下流などで構成されており、市民が親しむ水辺空間として様々な箇所で親水整備が実施されています。

・二ヶ領用水沿川では、新旧様々な市民団体が清掃活動、桜や桃の植樹と管理、散策ガイド、歴史研究など、多様な活動が行われています。

二ヶ領用水の上流（上河原取水口）から下流（川崎区）にわたって、各区間の特徴を次頁以降に示します。

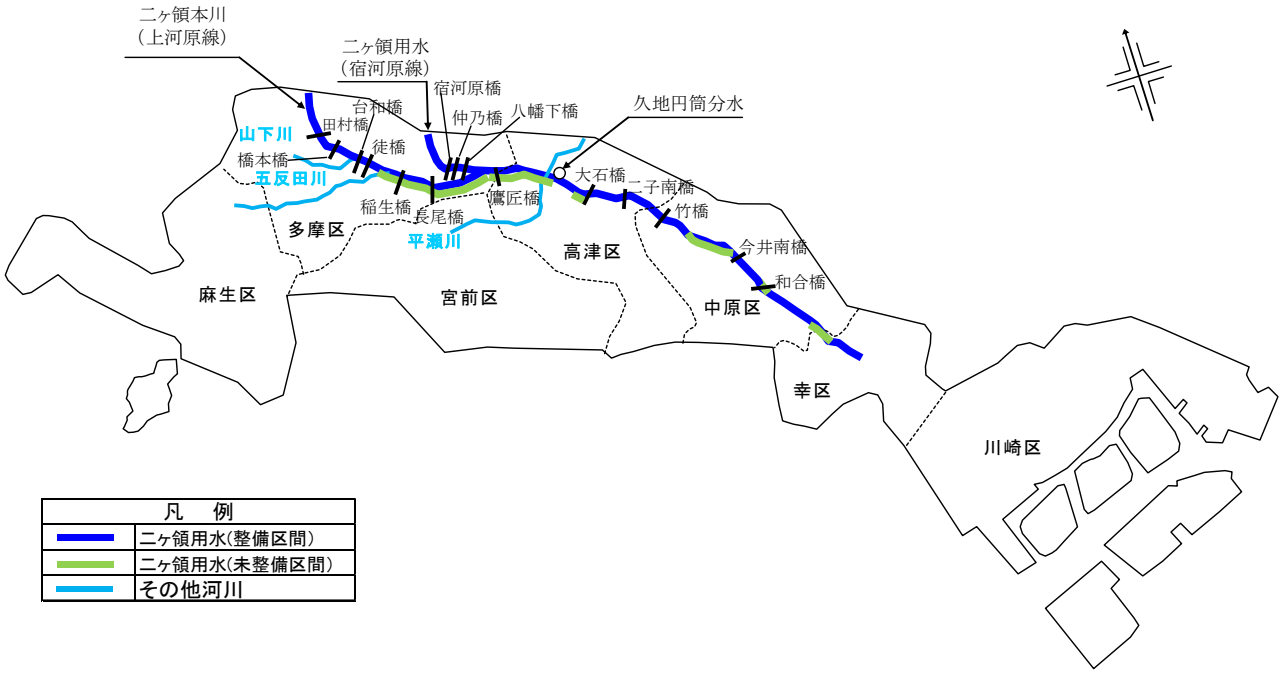


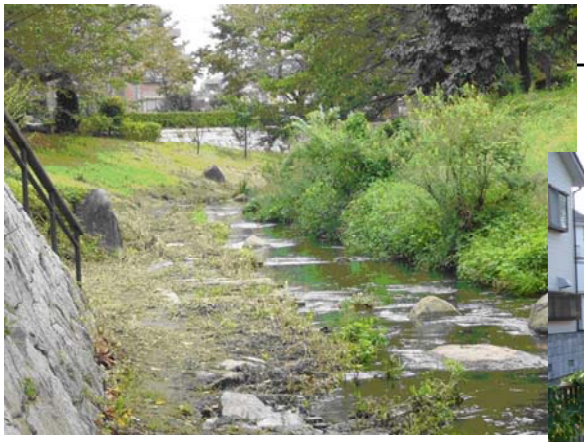
図 9　親水整備状況

【上河原取水口～台和橋まで】

台和橋より上流の区間は、昭和 60 年度以降に、自然豊かで市民が水に親しむことができることを目指して整備が行われました。水辺に近づける場所も多く、付近の市民が水とふれあう貴重な空間として活用されています。

南武線交差付近

田村橋付近



橋本橋付近

だいわ
台和橋付近

写真 6　上河原取水口～台和橋までの様子

【二ヶ領用水宿河原線】

二ヶ領用水宿河原線は、周辺の自然をそのまま活かすように桜並木が整備され、また、親水性や生態系に配慮した整備が全区間にわたって行われていることから、多くの市民が訪れ、自然とふれあい、集う場として活用されています。

緑橋付近

なかの
仲乃橋付近

宿河原橋付近

はちまんした
八幡下橋

写真 7　二ヶ領用水宿河原線の様子

【台和橋～久地円筒分水まで】

台和橋から久地円筒分水の区間は、五反田川の流入などの影響により、治水上十分な断面を確保する必要があることから、三面張りの直立護岸の区間が多くなっています。

かち
徒橋付近

いなお
稲生橋付近

ながお
長尾橋付近

たかじょう
鷹匠橋付近

写真 8　台和橋～久地円筒分水までの様子

【久地円筒分水～渋川分岐まで】

久地円筒分水は平成 10(1998)年に国の登録有形文化財に登録されています。また、平成 21(2009)年度に二ヶ領用水の歴史・文化を継承する拠点として整備が行われています。

久地円筒分水から竹橋上流までは、親水性・景観に配慮したフェンスが設置されている区間となっています。

久地円筒分水

大石橋

竹橋付近

ふたこみなみ
二子南橋付近

写真 9　久地円筒分水～渋川分岐までの様子

【渋川分岐～平間配水所まで】

渋川分岐地点から平間配水所の区間は、親水整備が実施されている区間もありますが、昭和初期から実施されてきた三面張の水路が施工当時のまま残されている部分もあります。

渋川分岐付近

和合橋付近（わごう）

今井南橋付近

綱島街道との交差付近

写真 10　渋川分岐～平間配水所までの様子

【平間配水所（旧浄水場）より下流】

平間配水所（旧浄水場）より下流の区間は、川崎市の工業化に伴い開発が早期に実施されたことから、現在では、多くの水路が消失し道路や宅地へと姿を変えていますが、昔の水路を復元している区間（大師堀）や緑道として整備されている区間（町田堀）もあります。

町田堀跡

大師堀

平間配水所（旧浄水場）付近

南河原用水分水点跡碑

写真 11　平間配水所より下流の様子

(2)　水量・水質の状況

二ヶ領用水の水質は、高度経済成長期に悪化していましたが、下水道の普及や市民活動などにより水質が改善され、近年では、二ヶ領用水の環境基準である B 類型（3mg/L）をほぼ達成しています。

※環境基準 B 類型とは、環境基本法により生活環境を保全するうえで維持することが望ましい基準として定められているもので、その中に河川の状態を表す基準（ＢＯＤ）が示されております。基準については、ＡＡ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅと６段階に評価され、今回、示したとおり、二ヶ領用水については環境基準Ｂ類型となっています。

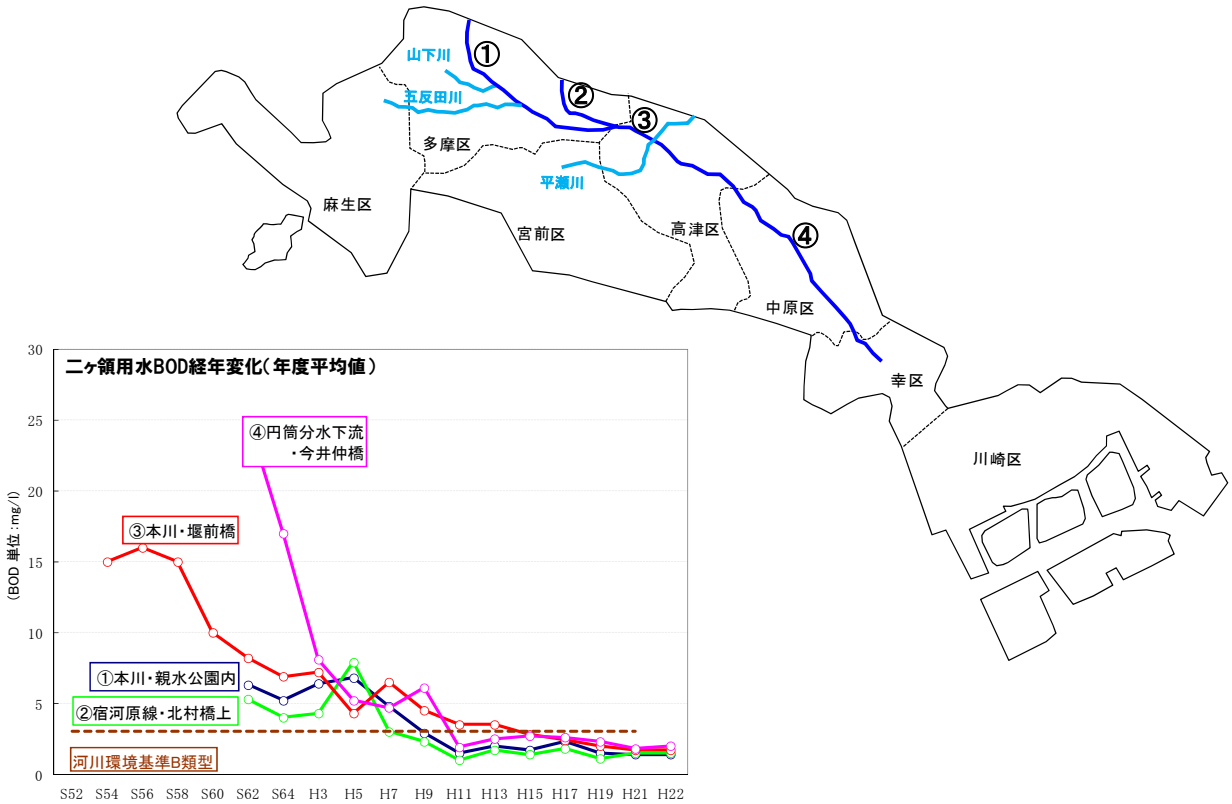


図 10　二ヶ領用水水質状況（BOD）

また、二ヶ領用水からの取水量も年々減少傾向にあり、昭和 9 年に 9.349m³/s あった水利権量が、平成 7 年には 3.65m³/s となっています。

表 1　二ヶ領用水における水利権量の変遷（工業用水含む）

年次	水利権量
昭和 9（1934）年	9.349 m³/s
昭和 56（1981）年	5.85 m³/s
平成 4（1992）年	5.05 m³/s
平成 7（1995）年	3.65m³/s

2.4. 二ヶ領用水と市民とのかかわり

二ヶ領用水では、沿川の住民が散策や水辺に親しむほか、二ヶ領用水を舞台として新旧様々な市民団体が活動しています。清掃活動や桜や桃の植樹と管理、魚つかみ、散策ガイド、ウォーキング、歴史研究・竹炭を利用した水質浄化等、様々な活動が実施されています。

（かわさき水辺の楽校での魚つかみ）
（平成 22(2010)年 8 月）

（マジックハンドを使った清掃）
（平成 23(2011)年 11 月）

（みんなで歩こう二ヶ領用水）
（平成 22(2010)年 9 月）

（二ヶ領用水一斉清掃）
（平成 22(2010)年 11 月）

写真 12　二ヶ領用水での市民活動の様子

(1)　二ヶ領用水における市民活動の状況（平成 22（2010）年 3 月時点）

「二ヶ領用水中原桃の会」や「二ヶ領用水ウォッチング・フォーラム」などの二ヶ領用水を中心に活動している団体のほか、多摩川関連の団体やガイド関連、文化･芸術関連、観光･まちづくり関連の団体などの多様な分野で活動する団体が二ヶ領用水にかかわる活動を展開しています。また、「二ヶ領用水宿河原堤桜保存会」や「中原区文化協会」などの 70 年代に設立された歴史のある団体のほか、「NPO 法人多摩川エコミュージアム」や「久地円筒分水サポートクラブ」、「なかはら散策ガイドの会」、「二ヶ領用水宿河原堀を愛する会」などの近年新しく設立された団体の参画もみられ、新旧の団体が二ヶ領用水にかかわる多様な活動を行っています。

表 2　二ヶ領用水にかかわる市民活動団体

分類	NO	団体名	形態※1		活動分野※2															設立年	メンバー数	年齢層
			N	市・ボ	ま	学	ス	保	児	高	社	生	環	動	子	校	情	N	地			
二ヶ領用水関連	1	二ヶ領用水中原桃の会		●	○	●	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○				1986	100	30～90代
	2	二ヶ領用水ウォッチング・フォーラム		●	○	○		○	○	○	○	○	●	○	○	○				2004		
	3	二ヶ領用水宿河原堀を愛する会		●	●								○		○				○	2007	63	60代
	4	二ヶ領用水町田堀の会		●	○	●						○									6	
	5	二ヶ領用水宿河原堤桜保存会		●	●								●							1974	126	
	6	円筒分水サポートクラブ		●	○								●							2010	12	
	7	二ヶ領用水中原桃の会ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ21		●	○	●	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○				2002		
多摩川関連	8	多摩川エコミュージアム	●								○	○	●							2002		
	9	たま・エコPJ		●	○	○					●	●								1998	18	70代
	10	とどろき水辺の楽校		●			○		○		○	○	●		○					2002	30	50代
ガイド関連	11	かわさき歴史ガイド協会	●		○	○					●	●								2004		
	12	なかはら散策ガイドの会		●	○						●	●								2009	35	50代
	13	高津シルバーガイドの会		●	●								○									
	14	多摩麻生観光ガイドの会		●	○			○		○	●	●	○			○				2009	9	60代
文化・芸術関連	15	さえの会	●		○	●					○	○						○		2005	80	10～70代
	16	高津区文化協会	●		●	○														2005	87	
	17	中原区文化協会		●		●	○													1971		30～70代
観光・まちづくり関連	18	川崎区誌研究会		●	○	●						○								1994	20～30	
	19	川崎市観光協会連合会		●	●	○	○				○	○										
	20	なかはら20年構想委員会		●	●																	
	21	かわさき創造プロジェクト	●								●	●				○	○			2005	40	60代

※1 N：ＮＰＯ、市･ボ：市民活動団体･ボランティア
※2 ま：まちづくり、学：学術・文化・芸術、ス：スポーツ、レクレーション、保：保健・医療・福祉、幼児、児：児童、
高：高齢者、社：社会教育、生：生涯学習、環：環境保全、動：動物愛護、子：子どもの健全育成、校：学校・教育、
情：情報化社会、N:NPO 支援、地：地域安全
活動分野：●：団体の主たる活動分野
○：主たる活動分野以外に実施している内容

（平成 22(2010)年 3 月時点）

(2)　二ヶ領用水に対する市民の意識

二ヶ領用水に対する市民の意識に関して、「かわさき市民アンケート」(平成 21(2009)年度)、「観光に関する市民意識調査」(平成 21(2009)年度)などがあり、その集約結果から以下のことが挙げられます。

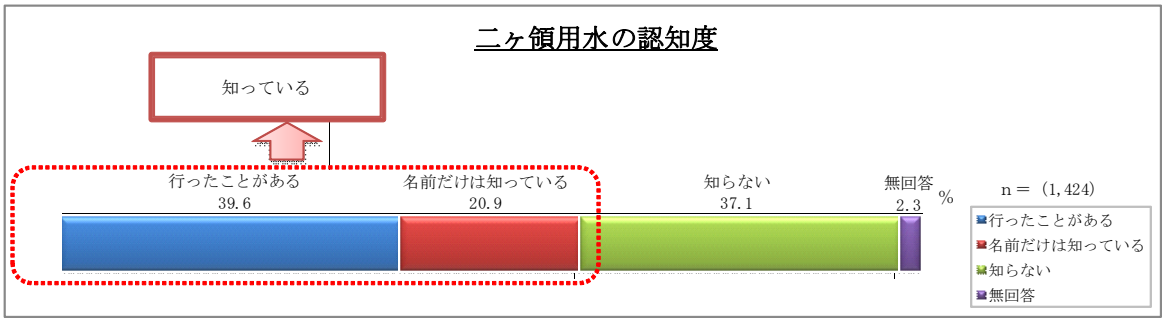
～既往市民アンケート結果にみる二ヶ領用水に対する市民意識～

- 二ヶ領用水の認知度は約 6 割。約 4 割が不認知。
- 二ヶ領用水の整備よりも自然環境の保全や歴史・文化の伝承が重視されている。
- 二ヶ領用水を活かした体験・学習型活動の充実や観光地としてのＰＲが求められている。

【アンケートの結果】

○二ヶ領用水の認知度

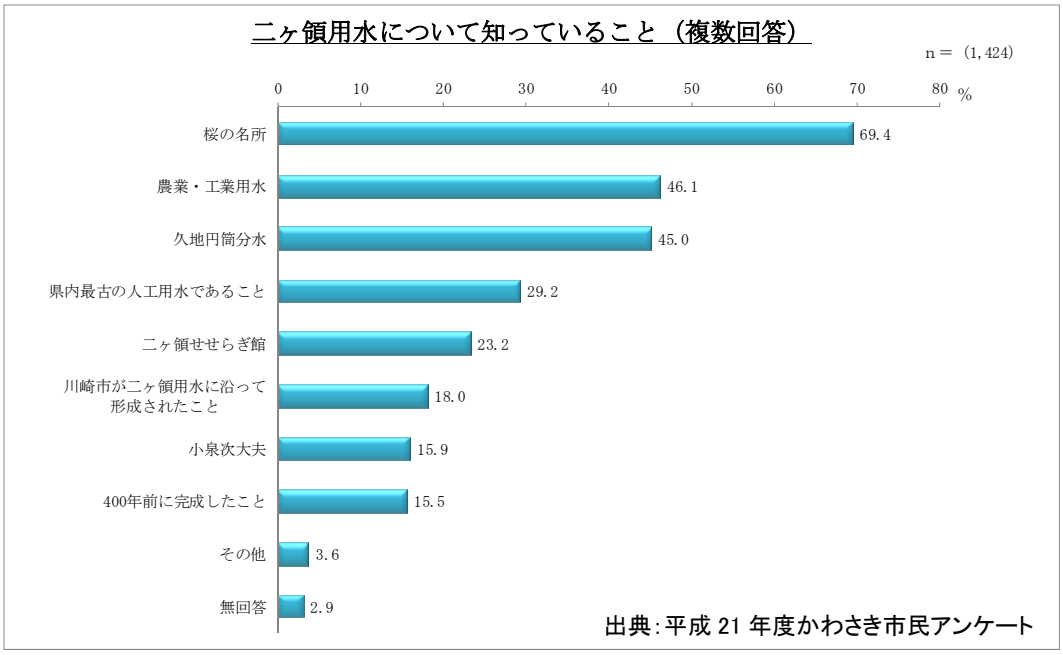
「行ったことがある」と「名前だけは知っている」を合わせた＜知っている＞が約 6 割を占めています。一方、「知らない」も約 4 割を占めています。



出典：平成 21 年度かわさき市民アンケート

○二ヶ領用水について知っていること（複数回答）

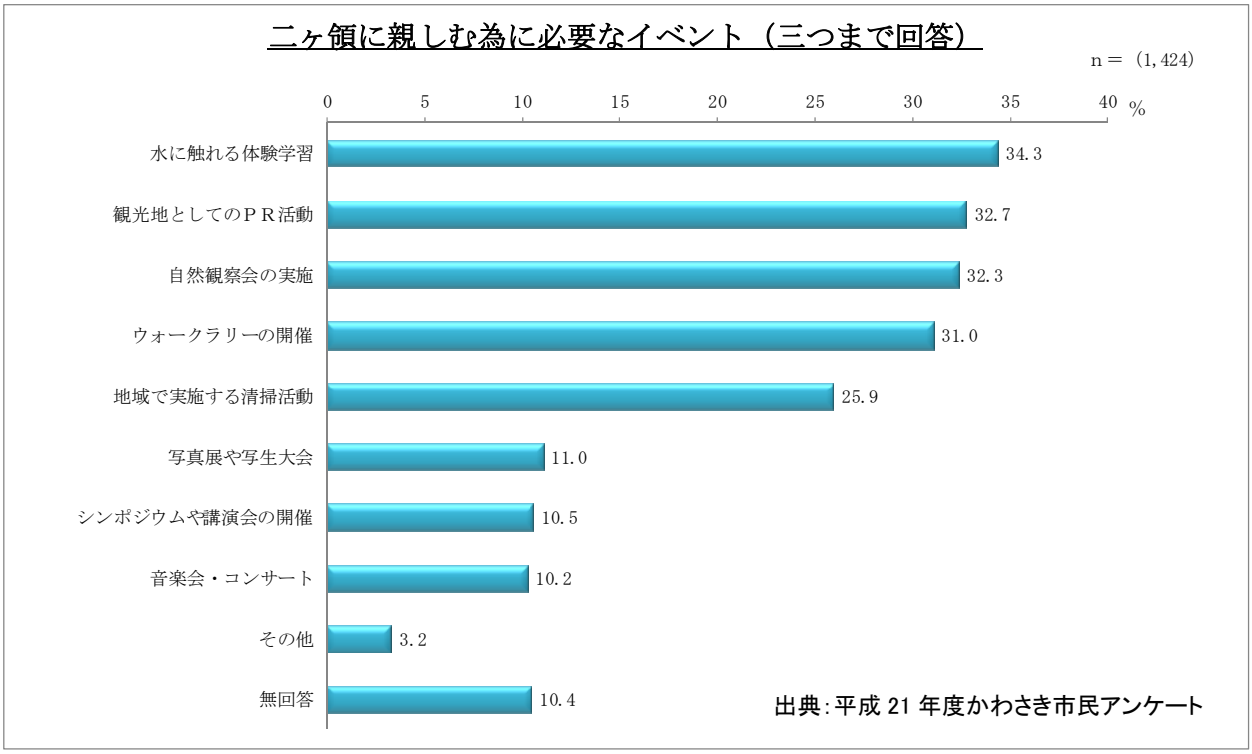
「桜の名所」が約 7 割と最多。以下「農業・工業用水」、「久地円筒分水」と続いています。



出典：平成 21 年度かわさき市民アンケート

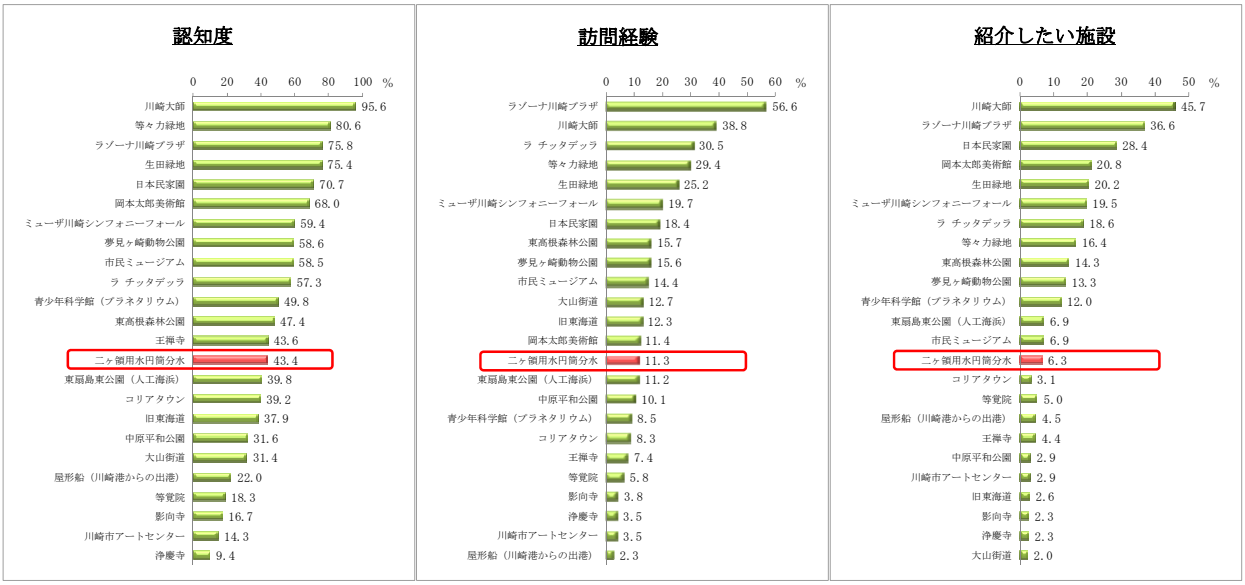
○二ヶ領用水に親しむために必要なイベント（三つまで回答）

「水に触れる体験学習」が 3 割強と最も多いです。次いで「観光地としての PR 活動」、「自然観察会の実施」、「ウォークラリーの開催」、「清掃活動」が多くなっています。



○観光資源としての認知状況等（久地円筒分水）

二ヶ領用水久地円筒分水は、市内の主な観光施設・場所において、認知度や訪問経験、紹介したい施設としての順位は、ほぼ中位に位置しています。

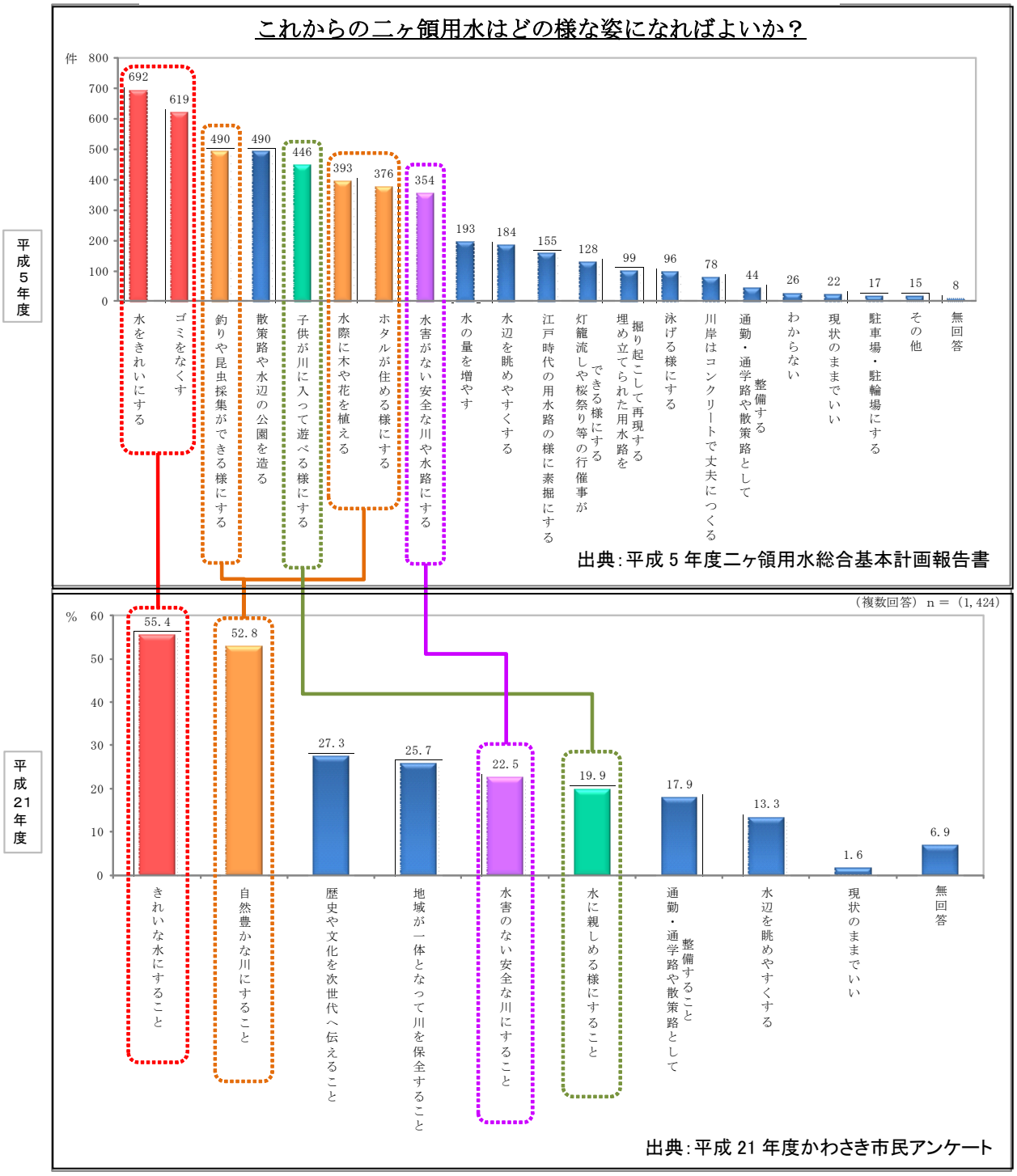


出典：平成 21 年度観光に関する市民意識調査

○これからの二ヶ領用水に重要なこと（平成 5(1994)年度と平成 21(2009)年度の比較）

「きれいな水にすること」が計画策定当時から現在においても変わらず、最多でした。同じく「自然豊かな川にすること」も変わらず多くなっています。

また、平成 21(2009)年度は、新たに「歴史や文化を次世代に伝えること」や「地域が一体となって川を保全すること」が上位に位置しました。



2.5. 二ヶ領用水への川崎市の取組

川崎市では、二ヶ領用水が有する治水・利水・環境の維持・向上や、市民の活動に対する支援に向けた様々な取組を実施しています。

(1) 二ヶ領用水の環境・親水整備

川崎市では、昭和 60 年ごろから、都市における多様な河川景観の形成・親水性向上を目指して、二ヶ領用水全川にわたって環境・親水整備を進めています。

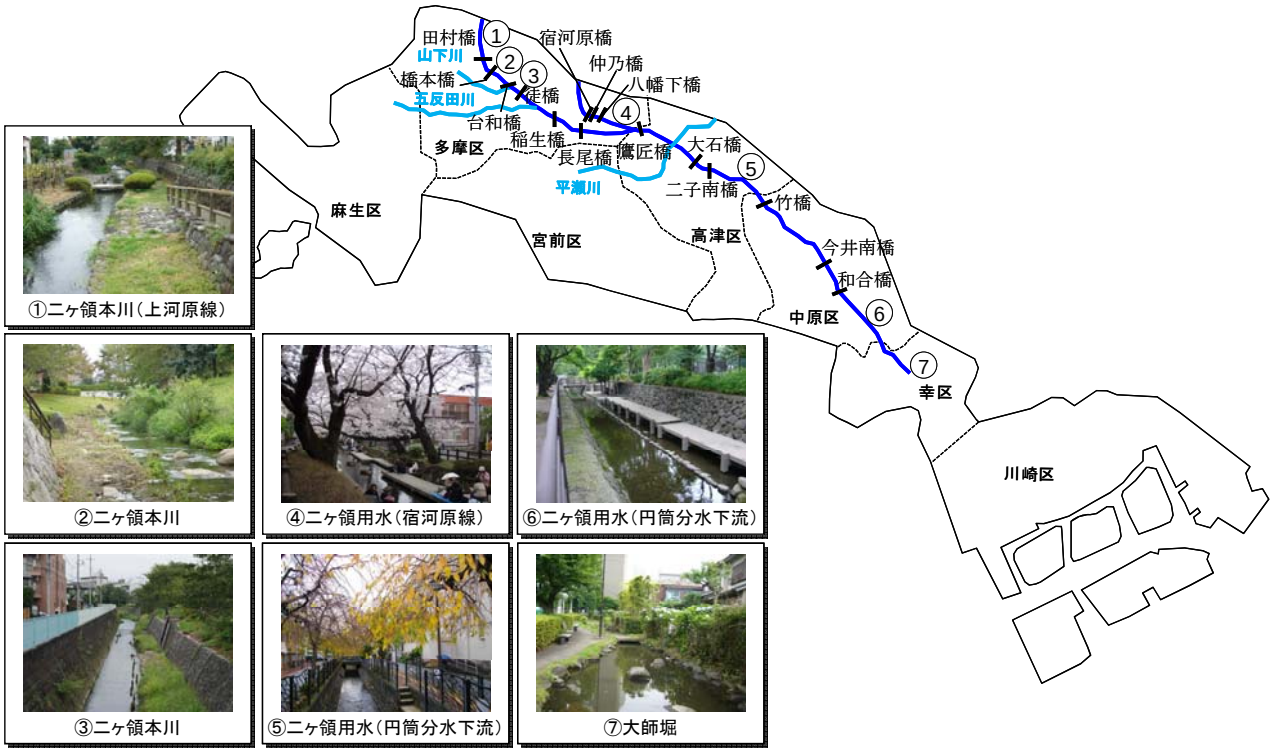


写真 13　二ヶ領用水における環境整備の例

(2) 二ヶ領用水の治水整備

二ヶ領用水については、一定規模の降雨に対する当面の安全性を確保するための整備が完了しています。

更に、五反田川放水路の整備によって、二ヶ領用水の治水安全度はより高まります。

また、河川の整備以外にも、流域の雨水貯留浸透施設の設置を推進し、雨水を流域に一時貯留することで、洪水規模を低減する対策も推進しています。

(3)　二ヶ領用水竣工 400 年記念プロジェクトの開催

平成 23(2011)年 3 月に二ヶ領用水が竣工 400 年を迎えることを契機に、平成 21(2009)年 4 月 26 日に市民主体で「二ヶ領用水竣工 400 年プロジェクト」が発足し、二ヶ領用水竣工 400 年記念事業が始まりました。当プロジェクトには最終的には 35 の市民団体が参加し、2 年間で 120 以上ものイベントが開催されました。また、その中で散策マップや学習教材用の DVD（2 枚）の制作、知絵図の改訂、散策マップの作成なども行われました。竣工 400 年記念事業をきっかけとして団体相互の交流・連携の芽が育ち始めています。

（DVD の制作）

（二ヶ領用水散策マップの作成）

（プロジェクト結成の集い）

（宿河原堤の桜並木の菰（こも）巻き）

（植樹祭での広報活動）

（情報誌の掲載）

平成 23(2011)年 2 月 27 日（日）には、中原市民館において「二ヶ領用水竣工 400 年記念シンポジウム」が開催されました。このシンポジウムは、「地域社会に対する愛情と誇りを育み、今後のまちづくりや地域活性化につなげるため、地域の貴重な資源である二ヶ領用水の歴史、文化を学び、地域資産として後世に伝えていく」ことを目的としたもので、当日は 500 人以上もの来場者があり、二ヶ領用水に対する市民の熱い思いを参加者全員で共有する機会となりました。

（プロジェクト発表会）

（阿部 孝夫川崎市長 あいさつ）

（フォトコンテスト）

（小学校のとりくみ発表）

（基調講演 村松昭（絵本作家））

2.6. 二ヶ領用水が抱える課題

二ヶ領用水は、市民の憩いの場として、また川崎のシンボルとして後世に継承するために整備が進められてきましたが、現状においては多くの課題が残されており、市民が考える意見として以下の項目が出されています。

表 3　二ヶ領用水が現状で抱える課題

大分類	小分類	現状の課題・問題点
水路の保全・保存	復元	・再開発に伴う復元計画がない ・緑道と一体となった再現ゾーンの検討 ・その場所の特徴を活かした整備がなされていない ・原風景の再現がなされていない
	保全・保存	・暗渠も含めた全水系の保全がなされていない（支川の消滅） ・保存の対象が絞られていない
自然環境の保全・保存	自然	・自然を残した治水対策がない ・桜や桃の問題（虫も含めて） ・生態系の悪化（例：蛍の消滅）
	水量	・水量が少ない ・下水処理水の活用が実施されていない
	水質	・水質が悪い（子どもが遊ぶには十分でない） ・汚水の流入 ・自然浄化力が弱い（例：素掘り、水草）
	景観	・沿川の放置自転車 ・景観形成
親水化		・散策路の整備が不十分 ・散策路の連続性がない ・親水性の整備が進んでいない ・柵・フェンスによる阻害 ・水路へのアプローチが悪い ・トイレやベンチの不足 ・用水の水活動と水防地点
歴史・継承		・農業・生活用水の面影がない ・歴史が見えない ・歴史研究の立ち遅れ ・工夫のある詳細なサインが存在しない ・二ヶ領用水のモニュメント・シンボルがない
市民協働・意識醸成		・市民意識の低さ ・マナー悪化（ポイ捨て） ・維持管理に費用がかかる ・市民ネットワークの維持 ・二ヶ領用水について周知させる必要がある ・子ども達を巻き込んだ活動 ・学校教育との連携が必要
まちづくり	防災	・防災の観点から二ヶ領用水を捉える
		・二ヶ領用水を保全していくための条例が不十分 ・二ヶ領用水の有効活用ができていない
計画について		・二ヶ領用水の位置付け・体系化

このような市民意見や現状での問題点を整理し、二ヶ領用水における課題を下記に示しました。

・川崎を育んだ「いのちの水」二ヶ領用水の適切な保全が求められています。
・桜まつりなど、市民に親しまれている樹木の老朽化が目立っており、計画的な更新が必要です。
・二ヶ領用水を川崎の宝として後世に伝えるために二ヶ領用水が持つ歴史、文化を引き継ぐ取組が必要です。
・二ヶ領用水全川において、市民意識、維持管理体制の向上が求められています。
・親水未整備箇所については、より水に親しみやすい整備が求められています。
・二ヶ領用水の沿川に存在する未利用地については、市民が集い、憩える場所とするための整備が求められいます。

2.7. 二ヶ領用水に望む姿

二ヶ領用水総合基本計画を改定するにあたり、これからの二ヶ領用水に望む姿について市民からの意見を整理すると、以下のようにまとまりました。

【都市の中での水路やその景観を保全する】

① 消滅してしまった水路が多くあり、後世に向けて出来る限り残していきたい
② 用水路らしい景観を守っていきたい

写真 14　左：昔の面影を残した整備（中野島付近）　右：用水路らしい景観（中原区内）

【豊かな自然環境を保全する】

③ 二ヶ領用水の豊かな自然環境を保全していきたい
④ 適正な水量の確保・水質の改善が重要である

写真 15　左：桃の木々（竹橋上流）　右：景観に合った水量が流れる様子（中野島付近）

【二ヶ領用水が育んだ歴史・文化を継承する】

⑤ 二ヶ領用水の歴史についてもっと深く知りたい
⑥ 歴史や文化を伝えるためのイベントや仕組みづくりに力を入れる
⑦ 二ヶ領用水を巡ることで歴史も学べるようにしたい

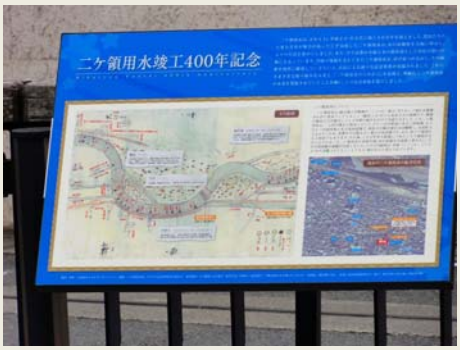


写真 16　左：歴史案内看板（八幡下橋）右：昔活用された草堰の存在

【市民が憩い、交流する場として活用する】

⑧ 二ヶ領用水を舞台として市民が活動できるイベントを推進したい
⑨ 二ヶ領用水を市民ネットワークの軸にしたい

写真 17　二ヶ領用水竣工 400 年プロジェクトでのイベントの様子

【歴史や親水性などに配慮した整備の推進】

⑩ 今後水辺を整備するにあたっては、二ヶ領用水が有する歴史・文化・自然に配慮した整備を行ってほしい
⑪ 市民が二ヶ領用水を利用しやすいように整備を進めて欲しい
⑫ 防災の観点からも二ヶ領用水を活用できるように整備して欲しい

写真 19　左：旧大師堀の拠点整備　右：親水性に配慮した整備（中野島中学校付近）

写真 19　左：二ヶ領用水宿河原線の整備　右：久地円筒分水の環境整備